

学生指導に見る心理臨床的接近について一考察

— 課題ある学生との7年間の経過を中心に —

藤 土 圭 三¹

On the Psychotherapeutic Approach to Student Guidance

— Based on Seven Years of Interview with a Student in Mental Trouble —

Keiso FUJITO

はじめに

本事例を取り上げるに当たってはクライアントの了解を得ている。事例の検討のためにはクライアントの協力なくて、それは不可能であるが、クライアントに検討の同意を求めたところ、快く同意を得ることができた。しかし、許可を得たからと言っても何でも自由と言うことにはゆかず、できるだけクライアントの心を煩わすこのないような、更には個人情報漏れるような記述は避けるようにした。このために本論文は原稿の段階と初校の段階との2度に渡ってクライアントに読んでいただいた。本研究では記述の視点をカウンセラー側に置き、カウンセラーの動き、かかわり、目論見(見立て)を中心に記述し、検討・分析した。従って、クライアントの症状の記述や経過については、できるだけ、抽象的に表現し、それでも記述しなければならない場合には、深い課題、幅広い課題、抽象的なエピソードとして表現した。

従って、本研究の狙いは、クライアントの病理の分析と言うよりも、カウンセラーのクライアント理解(診断・見立て)に立脚して、どのように対応し、どのような面接を工夫するかに焦点を置いた。この意味で、ここでは「カウンセラーの内的過程について」紹介し、検討した。最後になったが、本論文はクライアントにも読んで頂いて、不都合な部分やクライアントから見るとそうではないと言うところには加除・訂正をした。

問 題

大規模大学では、学生相談室などが用意され、学生の個人的問題は学生相談室に勤務するカウンセラーが担当するが、小規模大学では学生相談室の機能が十分に期待できないし、学生相談室が用意されていても専任の相談員を配置することは困難で、兼務の形で、配置されているのが実情である。相談は相談、教育は教育という分担が出来にくい状況がある。結果として学生相談(個別相談)と教育指導(研究指導を含む)とが同時並行的に一人の教員で実施する場合がある。

具体的には一人の教員が学生指導の実施するについて、個別相談対応を実施しながら、並行的に授業を実施すると、クライアントが授業も受けに来る場合がある。考え方によっては、貴方は個別

¹ 広島文教女子大学大学院人間科学研究科教授

相談の契約をしているから、私の授業は受講しないでほしいと告げることができるかも知れないが、そうすることもできない場合がある。更には、キャンパスが狭小のため、キャンパス内で、個別相談中の学生と接触する場合も多いし、こちらが面接以外には交流しないようにと考えていても、学生は親しさを感じて、接近してくることがある。さらに個別相談関係を形成すると、来談中の学生は卒業研究の指導者として相談担当者を選ぶ傾向がある。事実、そうなる場合が多い。

本研究では個別相談担当者が同時に授業や研究指導を担当した事例についての経緯を紹介し、そこに介在する課題や問題点について検討する。

見本事例は、入学と同時に紹介状持参で来室し、個別相談を希望し、高等学校時代の経緯について詳しく語り、これからの学生生活について、相談に乗ってほしいと希望した。インテーク面接段階では、相談助言の事例であろうかと考えて、引き受けることにした。

初回面接 一助言指導で切り抜けようとしたのだが？一

X年4月；クライアント(新入学生)は遠慮深い感じで、研究室を訪ねる。紹介状を持参していた。紹介状によると彼女は高校時代に精神的課題があり、専門的な支援を受けて、高校を卒業し、大学受験の結果、本学に入学したので、就学支援を願いたいということであった。

<事情を理解し、何か困りごとがあったら、相談にきてください>という一般的な言葉を返した。クライアントは、安心した感じで、これまでの経緯について、自分なりの感想を詳しく語った。<それは大変だったんですね。これからの生活で、いろんなことがあると思いますが、困ったことがあれば、話に来てください>と告げながら、<今、困ることがあれば、話されてもいいですよ>と水を向けると、「色んなことが心配ですけど」と、言葉を濁す。<そう！新しい生活で、心配が多いでしょう。私も昨年4月、他県からこちらに来て勤務するようになったのです>と話題繋ぎの意味をこめて言葉にしたが、期待ほどの反応はなかった。暫くの間、探索的質問での時間経過の後に、<ところで貴方は何科の学生なのと質問するに>「〇〇科です」と小さい声で返す。<そうですか>と言いながら「聞かなければよかった」と思った。来談学生は、ポツリ、ポツリと、ゆっくりとした語調ながら、これまでの経緯について詳細に語る。少しずつクライアントの絵姿が見えるようになる。<本当に大変だったんですね>と返す。月に一回は病院に受診していて、薬も貰っているとのこと。<そうですか。主治医とも相談しながら貴方がこの大学に通学できて、卒業できるようになりましょう>と返す。「そうしたいです」と言う。<曜日と時間を決めて、相談にきてもいいですよ>と伝えると、「はい」とは言うものの積極的に日時の契約をしようとはしない。<どうしますか>と押すと、「また来たい時に来たいです」と言う。<そうですね、それでは来たいときに、来るということにしましょうか？>「はい」と言う。ではまたと言って退室する。研究室の電話番号を知らせる。これがクライアントとカウンセラーとの相互交流関係の初回の模様である。カウンセラーは契約面接を念頭において話題にしたが、用心深いクライアントはカウンセラーの提案に簡単には乗らなかった。

カウンセラーはクライアントのこの用心深く慎重な生き方にどのような方法(技法)で交流関係を

形成するか、クライアントの心を開くための工夫が求められるところである。カウンセラーの当面の工夫はクライアントの心が安らぎ、癒される「心の居場所」となるような関係環境を作ることが大切なことだと考えた。

クライアントが大学環境の中で生活し、緊張を感じるときに、カウンセラーの元に来談できるような心理的環境を作ることには意を注いだ。とはいえ、簡単には相互交流関係を形成することはできにくい事例と見た。

見立てについての留意点

クライアントが再度カウンセラーの元を尋ねたのは、初回面接から10日後のことであった。部屋の前に人影を感じる。一呼吸後、忍ぶような感じのノック音がした。影姿からクライアントの来訪を感じたカウンセラーは大きな声で、<どうぞ！>と告げた。静かに入室した。椅子に腰掛けるように促した。クライアントは静かに着席した。<どうですか>と声をかけた。沈黙が続く。ようやく声を出し、「しんどいです」<そう！>「人間関係と境遇(環境)がめまぐるしく変わり、着いて行けません」と言う。「高校では予想もしなかったことが次々と迫ってくる感じです」と。<起こってくるのではなく、迫ってくる？>「そう！」<そうですか。確かに高校の場合とは違うかも知れませんね>と返す。高校は地元の進学中心の高校でした。勉強が好きだったので、自然な形で、受験したら、合格したと言う。2年生の後期までは、勉強のよくできるまじめな生徒だったとのこと。両親もクライアントの勉強好きを認め、将来を期待していたと言う。クライアントは高校時代から、親戚に下宿して通学したとのこと。<下宿先での生活はどうでしたか？>との質問に、「はい！小さいときからよく行き来していた親戚だったので、下宿先でも目一杯勉強し、友人も多く、クラブ活動にも参加し、有意義な高校生活でした」と言う。<full functioningですね>と言うと、「それはどういうことですか」と質問がくる。<無理なく、よどみなく、自然に、自由に心も体も機能していることを言いますが！>と返す。「私は少し違います、高校2年後半まではそうでしたが、高校3年の2学期ごろに不安定となり、養護の先生の支援を受けて、病院に受診しました」と高校時代のことを語り始めた。「心身症状」があったとのこと。暫くは入院を余儀なくされたとのこと。<そうですか、それは大変でしたね；その辺の話、よかったら詳しく聞かせてください、できれば時間系列的に聞かせていただけますか？>「正確な日時までは記憶にないところもありますが！」<よろしいです、記憶の範囲でいいです、それで十分ですから>ここでカウンセラーとしては、クライアントの表現できる範囲内で、心身症状の発症の契機、経緯、経過、特徴、結末について、できるだけ丁寧に傾聴することにつとめた。カウンセラーのここでの目論見(見立て)は、クライアントの心身症状の経緯や経過、結末を詳細に時系列的に傾聴することで、クライアントの事態に対する対応特徴を理解し、判断することを狙った。クライアントの緊急事態(心身症状)に対する対処方法(coping with)を理解することで、これからのクライアントとの交流関係における面接方略樹立のための参考にしたかった。更には、以前にかかっていた医師の紹介状にある所見の意味内容と行間(非言語的情報)の意味を理解するためにも必要なことと考えた。医師とカウンセラーとでは、よっ

て立つ根拠に差異があるので、訴えられる事象は同じ感じであっても理解の仕方には違いがあり、理解の仕方の差異は対処方略の違いがある。ここに心理臨床活動における「担当カンセラーの力量に立脚した見立て」が必要となる。

暫定的見立について

見立てと言う場合、医学的診断に近い言葉かも知れないが、心理臨床における見立ては、担当カウンセラーの支援力量の範囲内で、と言う前提条件での臨床心理学的査定(見立て)である。具体的にはクライアントの課題解決のための心理的メカニズムの仮定と方略と予後についての全てを含むものとなる。医学的診断は学問的にもはっきりした裏付けがあり、今日の社会では、それが公的な意味も持っているが、心理臨床活動での見立てはカウンセラーの支援力量とクライアントの課題解決のためのメカニズムや方略・予測などである。したがって、心理臨床活動における見立ては、面接過程に沿って、クライアントの理解度に従って、変化するものであり、暫定的な作業である。確定的見立てはクライアントの課題が解決するか、一段落した時に成立するものと思われる。従って心理面接では初回面接とそれに続く二回目面接あたりで、暫定的な見立てが行なわれる。担当カウンセラーはこの時点で、クライアントに対して一応の支援活動のあり方や対応の特殊性について説明し、クライアントの了解を得なくてはならない。この意味でここでの見立ては暫定的見立てとなる。

初期面接での見立て；クライアントの見立ては、カウンセラーの支援能力を前提として、長期の支援が必要とする。このためにはカウンセラーとクライアントとの間に豊かな心理的相互交流を形成し、持続し続けなくてはならない。交流関係が豊かな水準に維持されていれば、クライアントは何か支援が必要となった時に来談する可能性が高くなる。従って、当初の面接目標は心理的交流関係を豊かにすることとする。クライアントの課題発症のメカニズムや改善方略などについては今後の面接経過での情報を検討した後で、見立てることとする。ここでカウンセラーの置かれている学内での条件は以前に述べたように、授業を担当しながらの相談活動であり、研究室が相談室となる。さらに、電話が相談中に入ってくることがあるし、各種の会議などが突発的に入ってくこともある。更にクライアントとはキャンパス内で、遭遇することもある。このような諸条件の中で、カウンセラーは面接のための契約事項を実行しなくてはならない。

具体的には、面接時間が恒常的に確保できにくいし、クライアントが面接時間以外にもカウンセラーと会え易いと言うことがあり、面接以外はクライアントと合わないにすることは実行しにくい状況にある。このような実情の中で、カウンセラーは自己を守るためにも、クライアントとカウンセラーとの間に心理的距離を置くことを自覚し、常に留意した。このために、クライアントからカウンセラーに対して、「貴方は、本当に支援してくれるのかどうか、少し不満なところがある」と伝えたことがある。＜私のどこがそんな感じを持たせますか＞と質問すると「何か少し距離を感じる」と言う。＜そうですね。私があまり近くなりすぎないように、注意していますからですかね＞と言う会話をしたことがある。＜近くにはあるが、接触はしない＞を大切にしていると言う。＜

関係の持ち方のさじ加減が大切>と思う。特に同じキャンパスで生活し、授業も受けるし、研究指導までも求める場合には、一般の学生相談などでは考えられないことに留意しなくてはならない。

面接契約の問題；心理面接はクライアントとカウンセラーが心理的に近い関係を保持し続けるので、しっかりした面接契約が重要である。時間・日時・回数・場所など外的な契約は勿論であるが、同時にカウンセラー自身が、「接近すれども接触せず」との意識を持ち、自己が自己と契約をしないなくてはならないし、守らなくてはならない。契約が大切と言うことが、カウンセラーにとっても概念的には理解されていても、実際に、心理面接が長期間継続されると何時の間にか、異常な接近となり、心理的接触が無自覚的に発生することがあるので留意しなくてはならない。このためには折り目、節目に、仲間内で継続される事例検討会に自己の事例を提案して、第三者の目を借りて、クライアントとカウンセラーの関係の有様を検討することは大切な要件である。心理相談では、一人で面接を継続することは危険なことになる。

具体的見立て ークライアントの場合ー

思春期危機；離人感、うつ状態、不安状態、心身症状がある。摂食に課題があり、拒食、過食がある。対人関係は少ないが知的活動は旺盛で緻密である。

面接方略；緻密で一言、一言を丁寧に傾聴し、敏感に反応し、共感し、それをクライアントに丁寧に返し、クライアントの理解を深める努力をし、その理解を元に心理的な相互交流関係を形成し、交流関係を深め、維持し続けることで、クライアントの心(内的世界)に変化が見られた時の早期発見に努める。クライアントは青年期にあり、激動期にあるので、この激動をクライアントが上手に乗り越えるための支援をする。具体的には、クライアントとの話し合いの中からクライアントが考案し発見した合理的生き方が生かせる工夫をする。

第一期；X年4月～7月まで ー新環境への適応過程についてー

症状の訴えが続く。高校時代の前半は成績もよく、精一杯、努力した。勉強のよくできる生徒であったとのこと。クライアントの生い立ち、成長過程について詳しく語る。発症時の詳しい経緯を語る。関係専門書をよく読んでいて、博学である。家族関係についても詳しく語る。

三回目までの面接から次の面接方略を立てる。「軽度のうつ状態」にあり、主治医から抗うつ薬が出されている。経過観察を含めて、継続面接を契約し、面接によって得られる情報を元にクライアントの学生生活が平穩に経過するように支援する。

クライアントがオリゼミに参加する。積極的ではなかったが、参加して友人ができたとのこと。自分は一歩引くことで自分を守る気持ちがあることがよくわかったと言う。<一歩引くことで、わが身を守ると言うこと、上手に使うと美しい(控えめ)行為になりますね>「そうですね。言い方が上手いですね。ついその気になりますね」と言う。<ここでは言いたいことがあれば言ってくださっていいです>と水をむける。「以前、自傷があったのです」<そう、どんなことで、そうなったの>「無意識感覚になって、よく覚えていません」<そうですか、無我夢中という感覚ですね>、

親子関係について詳しく語る。自分たち(私と妹)は2人とも親の期待通りに成長してきているような感じがする。親の話をきっかけに保護者の電話と住所を聞く。

「7月に入り、マンションが暑くて寝むれない」とのこと、＜エアコン無いの＞と聞くに、「あるのはあるが、自分はエアコンが好きでない」と言う。自分の性格について深く分析する。よく本を読んでいて、色々と自分の行動分析をする。学科を変わりたいと言う。編入制度について説明し、その手続きについて相談する。

7月後半に入り期末試験があり、試験の話が多い。「試験も終わりに近づいた」とのこと。「高校の試験と比べて、回答がし易いので安心した」とのこと。「思ったより上手く乗り越えられる感じだ」とのこと。静かに、それでいて深い自己開示が続く。夏休みは、町の公共機関でアルバイトをするとのこと。自宅に帰れることを期待している感じが強く伝わってくる。

第二期；X年9月～12月

9月に入り夏休みが終わり、相談開始、深刻な表情を示す。＜どうなの？＞と聞くと、「何が何だか分からない誰かに寄りかかりたいが、誰に寄りかかるのも嫌な感じがする」と言う。「寄り係りたい気持ちと、それを拒む気持ちとがありとで葛藤しています」と言う。「これまでの自分は何だったのだろう、見当も付かない、何時も見張られている感じがする」と言う。自己のボディー・イメージについて語る。「これまでは自分の思い通りにできていたのに、今頃はそこまではできなくなった」と言う。＜これまでは貴方は自分の思うように自己統制できていた？＞「そうです。面白いくらい思い通りにできていたこともありました」と言う。「朝でも何時に起きると決めて寝るとその通りに起きることができていたこともあった」と言う。

「薬を飲んだら、ふらふらです」と言う。＜ふらふらでも面接は続けていきたいです？＞と聞くに、「いいです、むしろ聞いてほしいです」と言う。「ここに来ると気持ちが落ち着くのです」と言う。＜そうですか、ここが貴方の気持ちの居場所になれば、うれしいです＞と返す。4月から夏休みまでは契約面接が実行できたが、9月になってから予定外に来談するようになった。クライアントに依存的傾向が強く示された。「複雑な夢を見た」と言う。親子関係の葛藤を示す夢であったとのこと。＜親元で暮らすのと、一人で暮らすのと、どちらが貴方にとって良いですか？＞と聞くに「親元よりも一人暮らしの方が落ち着きます」と言う。食生活についても語る。食事は基本的欲求の充足行動であり、同時にそれは文化の一種であると言うことを本で知ったと詳しく語る。専門書を相対読んでいる感じである。

10月に入っても、面接予定日以外にも度々来室する。クライアントの随時の来談を拒むこともできないと考えて、カウンセラーの方で、クライアントが来談を希望する時には、時間の許す限り面接を引き受けることにした。大切なことはクライアントに契約実行を求めるのではなくカウンセラー自身が自分との間で契約条項をしっかりと守ることにする。具体的には、クライアントとカウンセラーとの間の心理的な間合いの取り方をしっかりと守り、堅持することで、自分を守りながらの面接を計画する。無自覚的に形成される二者間の心理的接近の様態を見つめ続けることに留意する。

見詰めながらの関与関係を継続する。契約とか場所に保護されないカウンセリング関係を形成することに努力する。

クライアントが言う。自分の課題は認知行動療法が適応なのではないか？ ここでのカウンセリングは矯正しようとはしないで、自然に治るのを支援するという方法ではないかと言う。＜そうですね。私はこの法しかできないのです＞と返す。クライアントは言う。「この方法が時間はかかるが無理がなく、楽しい」と言う。精神分析、精神医学、心理療法などの本を精読し、博学である。X年12月、平穩の終わりかなと思っていたが、急に依存的となり、不安を訴える。誰かに依拠したい。誰かに頼りたいと訴える。＜不安ですね、心配で一杯ですか？＞と返すと「そうだ、依存したい、依存してはならないの葛藤だ」とのこと。激しくなるかなと心配したが、安定を取り戻し、アルバイトもできるようになった。不思議な感じである。＜今月の初めはどうなるかと感じたが、上手く乗り越えました＞と言うと、「そうですね」と言う。

第一・二期の面接理解

X年4月から面接を実施して、多くのエピソードが蓄積された。何とか無事乗り越えてきた。親元から離れて独立し、自己管理をしながらの学生生活は大変なことであるが、クライアントは何とか乗り越えることができた。薬の力をかりながらの大学生活が実現した。

夏休みまでの心理面接は一応計画的に実施できたが、後期になるとクライアントは予約以外に何度でも訪室するようになった。同時にクライアントから、多彩なエピソードが傾聴できた。夏休みは自宅で生活し、アルバイトにも参加した。表面は順調な生活のように見えたが、クライアント自身にはアルバイトはしんどかったとのこと。4月以来の面接で、カウンセラーとしては、面接を契約に添ったものにしたいと考えたが、クライアントの希望を入れて(クライアントが来たいときに来る)、クライアントは自由に来談することを認め、カウンセラーがクライアントとの面接を契約に仕立てるように努力した。具体的には、クライアントとカウンセラーの間の心理的間合いの取り方に注意し、クライアントが来談した折には、＜今日はこれから20分にしましょうね＞とか＜次の面接はこの時間なら都合つきます＞と言うような言い方で、カウンセラー自身にこの関係は普通の関係ではなく(通常の面接とは異なった治療を目的とした面接関係)、治療面接になるように努力した。ここでの面接は(1)クライアントの訴えを丁寧に聴くこと。特にクライアントの語る事実の詳細な理解に加えて、その語りの中に含まれる何物かを感じ取るように努力し、聴き得たことをクライアントに返して、その反応に感じるようにする。(2)このような面接を構成することでクライアントは時間経過と共に自己開示が豊かになり、「心理的交流関係」が深く幅広いものとなってきた。(3)特に心理的交流が深くなるに連れて、情動面が露呈するようになり、クライアント自身がこんなことまで口にできるのですねと言い、ここでの雰囲気は不思議ですと言うこともあった。

第三期；X+1年1月～4月　―多彩なエピソードを訴えつつも―

1月になって、急にエピソードが多くなり、頻回の訪室が始まった。2月、3月と、様態が激変した。知らず知らずの内に、何かを食べた痕跡が残っている。しかし自分には食べたと言う意識がないと言う。＜無自覚のうちに何かを食べているの、お菓子の残りなどが散らばっているのに、自分ではその意識がないの＞と聞くと、そうだと言う。しかもプレミアの痕跡もあると言う。薬を飲んでいるのでこんなことになるのだろうかと言う。エピソードの内容を判断して、保護者に連絡するようにと要請する。始めは、躊躇していたが、同意したので、カウンセラーから保護者に電話する。同日の夜、母親が来談する。初めて保護者に会う。クライアントが何も言わないので、1年以上も相談に来ているとは知らないでいたとのこと。保護者の元に帰るように進める。急激な状況変化でどうなるかと思ったが、主治医に相談し、薬が変わったためか、安定して、来談可能となり、1週間後、クライアントは大学に来るようになった。＜元気になってよかったですね＞と言うと、「はい」と言う。何にもなかった感じである。状況が激変しても、アルバイトは継続しているとのこと。朝早い時間帯のアルバイトなので、自分に向いているのだと言う。

クライアントからは多彩なエピソード告げられる。しかし、授業も受けているし、約束も守れる状況で、新学期となる。学年進行と共に授業の内容も変わり、勉学にも熱が入る。しかし、次々とエピソードが語られる。

予約外の面接が多くなり、研究室の明かりが見えると来談すると言う状況になる。クライアントも「カウンセラーに面接することで心が落ち着きし、安心するのだ」と言う。＜ここが貴方の心の拠りどころですね＞と言うと、「そうです、助かっています」と言う。＜それでは、できるだけ貴方の要望に沿うようにするけど、約束は守るようにしてほしい＞と言うと、「そうする」と言う。次の日にも来談する。「やはり来たくなるのです」と言う。「顔を見ると落ち着きます」と言う。「学科の主任に相談して転学科の希望について相談した」と言う。「編入試験が夏休暇後にあるので受験したい」と言う。「転学科し、自分の希望する学科に変わりたい」と言う。＜転学科の希望動機について詳細に教えてほしい＞クライアントから「何時か話したいと思っていたので、ホットした」と言う。

第三期の面接理解

第三期は3か月という短期間であるが、クライアントはこの間に大きな決断をする。

転学科を希望し、学科主任に相談し、そのための受験準備に入る。カウンセラーとしては、これだけのエピソードを抱えながらも希望する学科への転学科をやろうとするクライアントの力強さに注目する。クライアントのこのエネルギーは活用できるのではないかと感じる。多彩なエピソードを訴えながら、尚も向上心を持続けるクライアントの底力を大切にしたい。

第四期；X+1年5月～7月 ―進一退の状況が続く―

入学後2年目に入る。クライアントが書いてきた一文を見る。複雑なエピソードが記載してある。エピソードについて突っ込んだ話し合いをする。梅雨時となり、うっとうしい日が続く、何か自分の気持ちと感覚が梅雨時の「鬱気」に近いと言う。「うっとうしいですね」と言いながら、自動車の免許に挑戦する。暫くして、仮免も取れて、ますますですと言う。細身だった身体も最近少し増加した。X+1年6月、クライアントから朗報がくる。中学以来停止していた女性の験しが始まったと言う。＜よかったですね。うれしいです＞と返すと、「そうですね。久しぶりです。もう無いものと思っていたのですが、不思議ですね」と言う。＜よかったですね。大きく変わるかも知れませんよ＞と返す。験しエピソードを語りながら、7月を迎える。＜もう夏休みですね＞と言うと、「そうですね」と言う。あまり感激は無い感じを受ける。

第四期の面接理解

クライアントはエピソードを訴えながらも、転学科したいと希望し、カウンセラーの後押しもあって、学科主任に相談し、気持ちを確認し、9月ころ、行われる転学科編入試験に挑戦すると言う。転学科をしたいと希望し、その方針が決まる時を同じく「女性の験」を見る。クライアント自身も驚くエピソードとなる。転学科がうまく行けば、これでクライアントは課題から開放されるかも知れないと感じた。入学して1年と少し、クライアントは新しい希望と課題に向かって前進する方向を掴んだかなと感じた。希望を抱きながら夏休みに入った。カウンセラーはクライアントの合格を祈る思いであった。

第五期；X+1年9月～12月 ―激しいエピソードに揺れ動く―

9月初旬、母親が来談する。これまでの状況について母親と話をする。母親が帰って後に、クライアントが来談する。親子関係の話、小・中・高等学校での交友関係について詳細な話が続く。＜深い自己開示ですね＞と言うと、安心した表情を見る。

急に様態が変わる。授業が頭に入らないし、何か頭の中に泡がたまっている感じがすると言う。＜そうですか、どうするかね＞と言う。どうなるかなと、思ったが、丁寧な面接を続けていたら、落ち着きを取り戻し元気になる。「自分は物事を否定的にばかり感じている」と言う。どろどろしたことを一杯書いてくるが、面接は健康な話になる。＜何か心をゆだねるのがいいのかも知れませんね＞と言うと、「実はここに来ると気持ちがずーと落ち着くのです。ここは私にとって心の拠りどころです」という。「どろどろとしたものを感じながら、それに身をゆだねながら、それと共に生きているのです」と言う。＜そうですか、その生き方は私にとってもうれしいです＞と伝える。

事態が急変する。「自分が自分で無い感じがする」と言う。保護者に連絡を取って迎えに来てもらう。夜中に保護者が来学する。保護者が迎えにくることになるとクライアントは安堵の感じを示す。保護者が来てくれるだけで、クライアントは安らぎを感じるのかと思うと、親子関係の深さと

不思議を感じる。当然のことかも知れないが、心安らぐ親子関係を実感する。保護者が来校するまで、クライアントは筆者の部屋で椅子を並べて横になったり、起き上がったたりしながら、ぼつりぼつりと心話を話した。

実家で養生後、先月の不安な状況について詳しく語る。＜大変だったですね。これから何かあれば何とかして乗り越えたいですね＞と告げる。親子関係、姉妹関係について語る。更には特異な体験(症状)についても語る。詳しいメモを取っている。暫くは順調に経過していたが、ある日の22時過ぎに、病院の医師から電話があり、クライアントのアクシデントの処置について相談を受ける。緊急処置を願うと共に保護者に連絡し、病院に来てもらえるようにして、筆者もクライアントが緊急入院した病院に行く。夜明けに保護者が到着する。クライアントの混乱も落ち着いてきたので保護者と共にクライアントの下宿に帰る。翌日、クライアントは実家に帰り、かかりつけ医に受診する。故郷に帰ったその夜に電話があり、「会いたい」と言うので、＜こちらに帰ってきたら、また面接に来てほしい＞と伝える。3週間後、偶然にキャンパス内でクライアントを発見する。＜帰ってきたのですね＞「そうです」。「今、帰りました」。「貴方のところに今尋ねたところです」と言う。研究室で、面接に入る。過日の緊急処置を受け、保護者の迎えを受けて、実家に帰った時の重いエピソードを語る。このことについて、かかりつけの主治医に色々と相談したが、主治医は何時もの通りの薬を出したとのこと。更に出身高校の養護教諭にも会って、保健室に来た課題ある生徒との面接を手伝ったとのこと。

実家に帰ったときの主治医との話を詳しく語る。「同じことばかり聞いていた」と言う。＜どんなことを期待していたのですか＞と聞くに、「こちらの訴えを聞いてくれて、それに対して医師の思いを返してほしいのだ」と言う。＜それは私との面接でできるのではないかと＞と言うと、「それはそれでよいのだが、医師にも同じことを期待するのだからできない」と言う。しかし、手のひらを返したように元気になる。保護者から電話があり、この間のことが嘘のようだという。

第五期の面接理解

順調な生活が継続しているかに見えたが、急に様態が悪くなり、近くの病院に入院した、当直医から、筆者に電話があり、急遽駆けつけた。保護者の名前よりも筆者の名前が担当医に告げられたことは、日常の面接が効果を示したものと考えた。クライアントにとって誰かの支援が必要な時に担当カウンセラーの名前を伝えたことは、両者の間に意味ある関係が形成されていた証拠と考える。急遽、激変し病院に担ぎ込まれた。緊急の処置を受け意識を取り戻した。保護者にも連絡した。ここではカウンセラーは完全に世話役機能に携わる結果となった。一人で生活する学生との心理面接を継続する場合には時として、世話役機能を担わなくてはならないことがあることを自覚しておく必要があるように思う。心理面接が継続するためには、その環境を用意しなくてはならないので、カウンセラーに世話役機能を担うことも大切である。

第六期；X+2年1月～3月 ー私の居場所は、実家と下宿とこの部屋(面接室)ですー

元気がよい、昨年11月の激しい動揺は嘘のような感じがする。将来について語る。＜どんなことなの＞と聴くに、大学を卒業し、院に進学し、終了後は故郷に帰り、小さな相談室を開業したいと言う。そして課題のある子どもの支援がしたいと言う。

先日、父と共に車で市内(ダウントOWN)にでたとのこと。喫茶店でコーヒーを取り、色々と話をした。

2時間近く話をした。こんなに話し合ったのは久しぶりだとのこと。父親は帰り、一人で本を読み、夜はコンサートに行った。「下宿に一人していると何となく不安になる」と言う。「家に居るときには杣があり過ぎて窮屈だが、こちらに来ると一人暮らしとなり、杣がまったくなくなり、何でも自分の思い通りにできるので、かえって不安になるのだ」と言う。「人間は勝手なものです」と言う。

＜杣のない生活は不安になる？＞と返すと、「そうですね。杣のある生活が楽なのかもしれない」と言う。「私は下宿と実家とここ(面接)との3箇所だけの生活しかしていない。他の人間関係には参加せずにただ眺めている感じ」と言う。＜そう！眺めている感じがするの＞今までに実感のある人間関係は、高校時代の女友達一人だと言う。かばんの中からリングを取り出して、右手にはめる。＜どういう意味＞と聴くに、「ただ一人の親友です」と言う。「親友からの贈り物です」＜彼女は今どこにいるの＞と聞くに「関西だ」と言う。「私の誕生日がすぐ来ます」と言う。また「ひとつ年齢がかさみます」と言う。

＜何歳？＞「〇〇歳です」と言う。＜どんな感じ＞と聞くに、「歳は取りたくないです」と言う。「この部屋に来ると心が落ち着きます」と言う。「安心です。言いたいことをじっくり話せるし、聴いてもらえるし、ここは私にとって心の落ち着きところです」と言う。

＜ここが貴方の心の居場所になると言う話はうれしいです。この間も聞かせてくれましたね＞と返す。

第六期の面接理解

杣について語り合ったことは興味ある面接であった。杣があると言うことは一方では窮屈を感じるものの、他方では頼るものが無い、手掛かりのない生き方は、モデルの無い、情報の無い、右往左往の生活も楽なものではない。青年期のクライアントが人生の杣について、深く幅広く語り合うことは、クライアントにとっては勿論のこと、カウンセラーにとっても、有意義な話し合いであった。カウンセラーにとっては、青年期の自我発達の論文に記載してある自我形成のための杣の説明を実体験を通して知ることであった。換言すれば、実感と臨場感を持って、生きている青年の杣感覚を共感体験することができた。ここでは概念の杣ではなく、血肉の漂い匂う自我形成のための杣の実感することになった。実感としての杣、これこそ臨床の妙味の感じである。

今一つここで体感したことはクライアントの心の居場所機能である。これも成書にも書いてある

ことであるが、クライアントが心の居場所とするには、知的に決まると言うようなものではなく、クライアント自身の深い体験によって始めて体得できるものではないかと感じるし、またそれだけでなく、日常生活で使いこなすことができない。この意味で心理面接はクライアントの自我の再形成のための体験場なのである。面接は丁寧に、きめ細かく、安心の世界の中で、再体験することであり、それを用意するのが、心理臨床である。

第七期；X+2年4月～7月末まで 一新学科への転科と実習のためか症状が出る－

新しい学科に変わり、元気である。在学3年目となる。多くの体験談が語られる。「日常的生活が継続されている」とのこと。4月末になって、状態が不安定となる。「一つ一つの事象が並列的に並んでいて、統合がない」と言う。「離人感覚」が強くなる。「存在感が感じられない、授業にでて、そこに座しているのみで、何も頭に入らない」と言う。「再び激しい事態」が出現する。＜苦しいですね。時間のある間はここにいてください。貴方の心の安らぎが再来すればと願います＞と伝える。研究室の前で筆者の帰りを待っている。＜どうぞと部屋に導く＞具合が悪いので、「自宅に帰ることにします。医師に受診してきます」と言う。＜一人で帰れるか＞と聞くに、「母親が迎えに来てくれる」と言う。1週間後に来談する。＜どうでした＞と聞くに、主治医は「うまくやっている」と言う。「自分には2つの心があり、一つはこだわる心であり、他は常識の心」と言う。＜そうですね、2つの心の働きのバランスが取れるようになりたいですね＞と返す。「自分が自分でない心と、授業に出て、普通通りにノートを取りたい心とがあり、共に存在するのだ」と言う。「自分はクラゲのように水中をふらふら漂っている感じがする」と訴える。「境界がはっきりしない、浮いている感覚だ」と言う。＜＜実習が近いので、ストレスが刺激となって、症状が誘発されているのではないかと＞＞と見立てる。不安感一杯のまま、実習に参加する。実習中に電話がくる。実習に入ると予想外に元気がでたとのこと。実習前の心配は杞憂に過ぎなかった。実習中の感想として、教師は子どもとの間に距離を取りながら、指導しているが、私は子どもと手を繋ぐ関係で、子どもの指導を考えたいと言う。「色々心配したが、どうにか切り抜けられた」と言う。＜そうですね。不安が一杯でしたが、やればできるのですね、この経験を大切にしたいですね＞と返す。

実習をうまく切り抜け、安定する。予想通り、実習前ストレスを乗り越えるための症状であったことが裏づけられる。実習が無事に乗り越えられた自信もあるのか、日常生活に復帰することができた。実習を通して実感したことは実社会には表と裏の激しい相克があることを実感したとのこと。具体的には、すばらしいことを口にする同じ方が日常では普通の方になるところを近くで見て、裏表の実態を見たと言う。この実習経験はクライアントの心に大きなインパクトを与えたものと思われる。実習が終わりに近づくにつれて適応力が高くなり、生き生きとした生活感覚伝わってくる。暫くして、激変する。課題を終えた後のリバウンドか、激しいうつ状態となり、何もする気がしなくなったとのこと。緊張感が無くなって不安な生活になってしまった感じがする。

自分は何か浮いている感じがする。水の上に浮いていて、下で生活する他の生き物を眺めている感覚だと言う。しかし自分から水中に降りて見ようという気持ちはない。中に入れない、一人でい

る。孤独というより浮いている感じだと言う。実習で感じたことだが、実習先は表裏の使い分けの激しいところだと言う。あのようにしないと世間は生き抜けないのだろうかと言う。7月後半、漸次元気となり、活発となる。期末試験が緊張感を醸成し、生活に張りがあり、うつ気分が薄らいできた感じがする。7月末となり、夏休暇に入りクライアントも自宅に帰る。

第七期の面接理解

新学科への転科と続く実習のためか、緊張が続き、症状を見る。薬も受けながらの実習であったが、何とか乗り切れた。微妙な心的変化をカウンセラーは丁寧に聴いて、聴いていることをクライアントに確認し、クライアントと共同で、如何に切り抜けるかを創生した。同時にクライアント自身も実習という新しい経験を通して、人間関係の複雑さ、人間行動の多様さを実感することになる。これらの経験はクライアントの再適応のための潜在力となるような面接が仕組まれなくてはならないと考え、それを実行した。具体的には、クライアントの感じる離人感を丁寧に聴いて、その中からクライアントの対処方略を発見し、それをクライアントと共に確認し、クライアントの出来る潜在力を鼓舞し、顕在化するという作業をした。クライアントが納得する対処方略を試験的に実施し、不都合な側面は、クライアントと相談づくで、改良するという迫り方を取った。夏休みになりか実家に帰る。ここでは深く幅広い理解、それをクライアントと共有し、確認し、そこから対処方略を工夫し、試行し、改良し定着する面接を構成する。

第八期；X+2年9月～12月 一異常(特徴)を生きる私ですー

新学期が始まり、クライアントも大学に来る。夏休みの前半は自宅で生活していたが、後半は大学で行う水泳教室に参加して、水泳指導を受けていたとのこと。＜水泳が上手になりましたか＞との質問に、「何とか」と答える。水泳教室の無いときには部屋にこもって色々考えていた。自己流に判断すると、心の中は不安なのに、殻がしっかりしているので、安定した生活ができています。「殻ができたことはいいことだと思う」と言う。心身ともに安定している。元気な生活を続けている。

12月になって急に様態が変わる。再び浮いた感じとのこと。離人感でしょうか。＜自分が自分ではない感じ？＞と返すとうなずく。後日、今日はこの間よりは気分がよい。何か上向いた感じがする。＜よかったですね＞と返す。手帳をみたら、2か月に一度くらいの割合で不安が襲ってくる感じがする。＜何か周期性がある感じですね。でもその都度、乗り越えたいですね＞と返す。「落ち込んだ時には、自分がどこにいて、何をしているのか確信がもてないです」。11月末の連休に実家にかえったとのこと。両親はそれぞれに用事で、家を空けていたので、実家に帰っても、結局は一人で休暇を過ごした感じとのこと。＜最近、ふっくらしてきた感じがしますが？＞と言うと、「はい、体重が少し増えました。自分でも変な感じです。体重が減少したときには30キロをきるときもあったのですから、現在は10キロ近くも増加しました」。＜すごいですね＞「最近はクレーに感動して、クレーの画集を手に入れました」。

12月に入って、再びバランスが崩れそうな感じがするとのこと。＜そんな予感がするのですね＞と返すと、「そうです。そうなりそうです」。何となくバランスが崩れるかも知れない予感がすること。「異常を忍びやかに生きている感じです」。＜すごい言葉ですね＞「異常を異常として生きるコツを覚えている感じです」。＜すごいことですね、うれしいです＞「一人でいたい時には風呂に入って本を読んで、人に会いたくなったら、学校に来るという生活です」。大学の推奨する短期留学に参加したいと言う。

第八期の面接理解

状態が悪くなったり、良くなったりしながらの経過をたどる。そんな中でも体重が増加したので、外見的には健康そうになった。特に大学の推奨する姉妹校への短期留学を希望し、相談する。クライアントは自分でも意識しているように、自分は他の同年輩の学生とは違ったものがあり、違った生き方をしていると考えながら、同時にやりたいことには挑戦すると言う積極性を示す。短期留学を申請したいと言うクライアントの気持ちに共感し支援する。繰り返し襲ってくる課題と戦いながらも生きようとするクライアントの潜在力はどこにあるのだろうか。一般に、自分のやりたいことには予想外の力が湧き出るのだろうか。今一つ注目したいことは、クライアントの体重増加である。クライアントは30キロ代を持続していたのが、10キロ以上もの体重増加を見た。食生活についても特に変化(工夫する)はないとのことであるが、現実には体重が大幅に増加を見た。この現実をどのように理解するか。検討したいし、今後の経過を観察したい。

第九期；X+3年1月～9月 一短期留学に向けて、元気ですー

冬休暇中は家に帰っていた。不安・心配に対する対処法が身についてきた感じがする。このくらいの状態なら家で寝て、このくらいの状態なら学校に、これ以上なら実家に帰ると言う生活の在り方・対処法が身についた。

これからどのような状況に遭遇するかわからないが、これまでの経験程度なら、何とか対応できそうだと言う。＜この調子で、生活で出来るようになるといいですね＞と支持する。クライアントが言う。「私もそう思います。ここ(面接関係)があるから安心なのです」と。「安心して生活できます」と言う。「がんばることもできるのです」と言う。「一人で生活できるのも心の中にここ(面接関係)があるからです」と言う。

1月末から3月末までは生活は安定し充実した。「集中講義も受けたし、友人もできた」と言う。2度目の実習も無事に終わり、一回目の実習であれほど緊張したのがまるで嘘のような感じである。「4年生になるので、そろそろ卒業研究も考えなくてはならないのだが?」と言う。＜そうですね、新年度から4年生ですね＞と返す。短期留学が実現する。夏休暇を中心に米国の姉妹大学に留学する。あれよ、あれよという感じで、自分で申請し、準備教育も受講し、他学科の学生と共に留学する。「最近、夢をみる」とのこと。「夢の中では自分が自由に活動することが多い」と言う。「留学生活を乗り越えることができれば、自分にも自信がつくかも知れない」と言う。

3月末から7月にかけては留学の準備や心構えの話が中心となる。目標のある生活のためか、クライアントの心性は安定している。穏やかな日々が続く。＜目標のある生活は貴方にとっては、意味あることなのだろうか＞と返す。7月後半から8月末にかけて1か月間、留学する。「留学を共にする学生と話していたら自分と同じような不安や心配のあることを知り、安心した」と言う。「明日には明日があり、何とかなるのだと言う気持ちちが定着する感覚、元気で留学してきます」と言う。

9月後半、クライアントが留学先から無事帰国する。留学先の大学は大きな大学だったとのこと。3週間は大学内で講義をうけ、1週間は近くの観光地を旅行した。世界一大きな瀑布を見た。留学先はおおらかで、平均化を求めず、特異性を大切にするとところだと言う。ホームステイにも参加した。ホストは大学教員の家庭だったとのこと。スーパーマーケットにも行った。大きく広く明るい活気のある店だった。24時間営業だった。現地では言葉による交流ができにくいということもあり、類退行的な生活(言葉の少ない単語中心の生活を示す)だったと言う。これはクライアントにとっては都合のよい生活環境であった。

第九期の面接理解

充実した生活の続いた9か月であったように思う。短期留学と言う事業に参加し、やり遂げる。留学希望の相談を受けた時には、どうだろうといぶかったが、クライアントは上手にやり遂げてきた。可能性を信じるとはこのことなのか。はっきりとした目標を持って生活することが、人の心に張りや緊張感をもたらし、不安・心配を払拭し、張りのある生活を招来するのだろうか。スポーツ選手のような生活と言う言葉があるが、この期のクライアントの生活はこれに近い生活ではないだろうか。

第十期；X+3年10月～X+4年8月

一箱庭作りが中心となり、箱庭を通して面接が構成される一

安定している。実時折来談し、日常生活の話をする。

12月中旬になり、離人感があるとのこと。様子をみて自分で乗り切れないときには、また相談したいと言う。激しいうつ状態となる。今が底の、底のような実感がするとのこと。＜急に状態が悪くなりましたね。じっくりと乗り切りましょう。私も側にいて、支えます＞と伝える。専門の授業で学んだ箱庭作りを希望し、関心を示す。色々な箱庭を作り、見てほしいと希望する。箱庭を手がかりに、クライアントの内的世界の有様について話し合えるようになる。箱庭作りは出来上がったものを2人でみたり、製作過程にも参加することもあった。箱庭は全体として静かで、モノトーンで、シンプルである。箱庭を介在して、箱庭を中心に語り合うことでクライアントの心性に落ち着きと安全を呼び戻すことができるかも知れないと言う仮定を持って、クライアントの作成した箱庭について積極的に参加し、語りあった。

箱庭制作を媒介にした面接が続く。神秘的な作品が提示される。時折、動物が登場する。猛獣が出たり、ウサギが出たりする。また、乗り物も登場する。田舎風景が創られる。赤い魚が泳いでい

る。多様な箱庭が提示され、それを媒介として、クライアントの思いカウンセラーの思いが語り合い、話し合いにずれがあると、より詳しく精緻な話し合いが作られる。何時の間にか折り合いが付き、共感しあい、互いが納得する。納得は安心と安定に繋がり、クライアントは安心する。

メモをもってくる。クライアントの心的内容が書きとめてある。メモを見ながら面接を組み立てる。家族の話がある。ローランサンの窓際の女性に自分を重ねる。カーテンの隙間から社会を眺めている。絵を描いたといって持参する。見せてもらう。全体が真っ黒な描画である。絵について詳しい面接をする。クライアントの気持ちと黒は一致すると言う。薬が切れたので、一度、実家に帰って、係りつけの病院に行ってくるという。医師は何時ものように面接し、薬を渡してくれたとのこと。多くの箱庭作品の写真を持ってくる。「一緒に見て話し合うと気持ちが安らぐのだ」と言う。＜それはうれしいですね＞と返す。今回の箱庭にはこれまで見られなかった「力」を感じる。それを指摘すると、「なるほど」と言う。＜元気になれるのですね＞と言う。「そうですね」＜この力を上手く使って、羽ばたきたいですね＞と返す。1月末になり、今回も何とか乗り越えられそうだとする。＜それはいいですね＞と返す。

「少しずつ元気になります」「先達での予想通りです」と言う。＜うれしいことですね＞と返す。今度は、コラージュ作品を持参する。学科の授業で受ける新知識をフルに活用して色んなことに関心を示し自分からやってみる感じである。2月に入り、回復した。元気になった。郷里に帰ってくる。3月は京都に妹と共に旅行に行く。楽しかった。美術館回りをしたとのこと。4月はコラージュを作って持参する。元気な様子、しかしコラージュは多彩であり、複雑な感じがする。5月はコラージュとバウムを作って持参する。二つの心理検査を媒介としてクライアントの内的世界について語り合う。5月末の面接で、卒業研究について話題にする。

6月はバウムとコラージュと自由画を描いて来談する。話題のための資料があり、ある意味ではクライアントの内的世界が推察し易くなるが、別の意味では話題が限られてくると言う功罪両面がある。いずれにしてもクライアントの内面理解には有効であった。

そのためか生活は安定する。この間、友人と話をしたら、そのあとで、何とも言えない心模様を感じたと言う。「どうしていいかわからない、どうなるかわからない」と実感を語る。時間が解決するのだと言う。今回は、自分で箱庭を作ったら、柵が外れたとのこと、どういうことだろうと言う。箱庭制作中に気づいたことだと言う。箱庭を頻回にわたって作る場合の意味について検討する。しかもクライアントの感情が箱庭制作過程に如何に反映されるかについて、自己体験を踏まえて開陳し、検討する。

7月には2枚の絵を描いて来る。描かれた絵について、イメージを豊かにして、語り合う。現実と幻想の融合するところ(境界)で語り合う。絵を描き、語り合うことで、何か世界が開くような感じがする。「自分はどうなるのだろうか、もうここからは抜けきれないのか」と感じたと言う。今は何か違う世界が掴めそうな感じもする、それが箱庭にも現れるのではないかと感じる。今回も大きな波(不安)だったが、何とか乗り切れそうな感じがする。波は自分の中であって、それを押さえつけたり、押しのけたりするのではなく、その波を上手く乗り切ることが大切で、そうしたいと思う

ようになったとのこと。絵を描くことと箱庭を作るようになってから、気持ちに落ち着きを感じているのだろうか。気持ちの落ち着きにつれてクラスメイトとの交流が進む。「最近、人と話す機会が多くなり、身の上話を聴く機会も多くなってきた」と言う。＜知人が貴方を相談相手にするようになったし、またそれが引き受けられるようになったのですね＞

X+4年8月；夏休みで、故郷に帰る。電話もメールもない。元気で生活しているものとする。

第十期の面接理解

11か月間の面接課程である。箱庭などの投映法を媒介として、面接を組み立てた。従来の言葉(会話)を媒介とした面接過程と比較して、話題が直接自分自身にかかわる話題ではなく、箱庭などの作品を媒介として、話し合うという面接には、それなりの留意点がある。自己表現が間接的であり、表現された作品を多角的に話し合うことを通してイメージ化するので、面接全体が希望的になったり、幻想的な話し合いになることがあったりした。何れの場合もカウンセラーはクライアントのイメージの世界と交流し、クライアントの思い、様態に参加しながら、現実との接点からクライアントが遠のかないように留意する。具体的には、時おり、その話と現実との関係はどうなるかなと問いかけて、現実との接点に留意した。イメージと現実との繋ぎ機能を大切にした。クライアントの語る夢の話(イメージ)を現実化して、社会の現実の中で、それをどのように具現化するかを語り合うようにした。ここではクライアント自身の特性から放出されるイメージ世界とクライアント自身の社会的接点とをどのように組み合わせるか、折り合いを付けるかが面接過程での重要な仕事となる。例えば、今回の作品では、「この人形が〇〇です。この人形は、うつ状態です、うつが続いています。落ち込んだ顔をしているとは思いませんか。回りに囲いを作って、自分を守っている感じです。ここに砂の中に埋まっている〇〇は覗いている感じですね。これが守ってくれる人ですかね」と言う。

＜そうですね、色々想像できますね、確かに落ち込んだ顔にも見えますが、落ち着いた、理知的な表情と言う見方もできますね、どちらにみるかは、その人の受け取り方です。受け取り方で、回りの環境への対応の仕方が大きく変わりますね。暗いと見るか、理知的と見るかによって、次の行動は大きく違いますね＞「ふーん」と言う。

第十一期；X+4年9月～12月 一進一退の感じであるが、それでいて生活は続く一

久しぶりに来談、8月末には学科の水泳教室に参加したとのこと。海には入らなかったが、合宿生活には参加し、共同生活ができたとのこと。「安定した合宿生活を送ることができた」と言う。夏休み前半は実家で安定して生活をしていたとのこと。＜7月末から9月半ばまでの夏休みは安心した生活だったのですね。だんだんと適応力が向上したのでしょうか？＞うなずく。

健康な感じがする。「自分の幼少期からの対人関係について詳細に語る。相手に近づき過ぎると緊張するくせがある」と言う。＜相手との間に間を取ることが大切なのですね＞と返す。「電灯がついていたので来た」とのこと。「関西へ旅してきた。楽しかった。自分には、波があり、上向く

ときと、沈むときとがあり、記録をみると2か月に一度くらいの割合で波が来るような感じだ」と言う。「連休は実家に帰ってきた」。しかし両親は多忙で、自分が留守番役になり、一人生活だったとのこと。＜寂しかったの、それともよかったの＞と聞くに、「そうですね。半々ですね」と言う。＜なるほど＞「一人で暮らしている期間が相当に長くなってきたので、一人暮らしの楽しさも知っているが、同時に一人でいると下宿にいたのと同じで、いいことばかりではないですね」。＜少しふっくらした感じがしますが？＞「体重が少し増加しました」。＜そうですか、よかったですね＞「はい、でもこれでいいです」と言う。画集を持参したので、絵について豊かな話が続く。「一人でいたい時には下宿にいて、読書し、人に会いたくなったら大学にくる」と言う。＜安定した生活ですね＞と返す。「そ・う・で・す・ね」と言う。

第十一期面接理解

クライアントの体験を詳細に語る。カウンセラーはそれを丁寧に傾聴する。クライアントは学科主催の水泳教室に参加する。クライアントにとって団体行動には積極的ではないが、水泳が上手になりたいという気持ちから、参加したと言う。クライアントの日記から、状況悪化が2か月位で襲って来る感じがすると言う。それにどう対処するか何となく理解できるとのこと。クライアント自身の幼少期から今日までの生活について、詳細に語り、自分なりの関連を整理して、自己理解を深める感じである。今期でも絵を描いてくる。絵を語り合う。黒い感じの絵が描かれる間は状態が安定しているが、絵に色が入ったり、全面的に配色が変わったりすると、クライアントの様態は一変する。

クライアントの絵は彼女自身の内的世界そのものの感じがする。絵を媒体として、クライアントを知り、クライアントの生き方を見る。理解と生き方をクライアントと共に語り合う面接が延々と続く。

第十二期；X+5年1月～8月 一予兆があると言いながらの日常を丁寧に語る一

＜正月はどうでしたか？＞「まずまずです。昨日あたりから、また例のものを感じます、でも最近はその対処方法が分かってきたので、このくらいなら下宿で寝ていよう。このくらいなら親元に帰ろう、このくらいなら、このように対処しよう」と言う。＜そうですね、治すと言うよりも、乗り越えると言うことですね。私もうれしいです＞と伝える。「ここがあるからだと思います。安心して頑張れます」と言う。＜そうですね＞と返す。「静かに、それでいて静かな生活をしています」とのこと。クライアントの友人が来て、若者の問題について語りあったとのこと。科学研究では、それは母親要因を主張するが、それによって母親のあり方を責めて見ても仕方ない、現実の母親のあり方を包摂して、どうするかを考えなくてはならないと言うような話になったとのこと。＜すごい話をしているのですね＞と言う。

集中講義を受ける。一日中座りっぱなしで、きついとのこと。先輩の卒業研究の発表を聞いた。2月も末になったので、自宅に帰る前に来談したとのこと。最近、夢を見るとのこと。自宅の生活

について電話してくる。＜心和む生活ですね＞と返す。ふっくらした感じを受ける。血色も元気そうな感じがする。

「予兆がある」と言う。＜そうですか、一人で乗り切れないなら連絡してください＞と伝える。「何とか乗りけれそうだ」と言う。5月末には、「元気になった、どうして回復できなのかわからないが、元気を回復できた」と言う。「何か話がしたくなったので、来談した」と言う。

第十二期の面接理解

学生としての生活が順調に続いている。X+5年の前半は無事に終了した感じである。後半はどうなるのだろうか？

第十三期；X+5年9月～12月 何かをはらみながら、平穏な生活を経過するー

保護者会に出席した保護者が来談する。最近は見違えるほど元気で、生活している感じとのこと。元気で実習にも参加したし、身体的にも健康そうな感じがするとのこと。家庭でも以前に比較して、学校のことをよく話すようになったとのこと。

クライアント自身が来談し「実習も乗り越えることができた、うれしい」と言う。

＜私もうれしいです、貴方の努力に感激です＞と返す。元気に生活する。顔色も健康そうに見える。先日、実習報告も終えたとのこと。パソコンを買った。統計分析の勉強中とのこと。しかし、12月中より予兆が示される。箱庭を作り始める。箱庭の効果のためか、何とか乗り越えられそうとのこと。クライアントの作成した箱庭を2人で語り合う。何か変わり目かもしれない。

第十三期の面接理解

予兆を感じるとクライアント自身が箱庭を作ってくる。箱庭の中に何かを投影し、それを語ることで、課題の乗り越えを図れるようになる。クライアントの創生した生き方である。

第十四期；X+6年1月～12月 ー箱庭、絵画などを媒介にした面接が続くー

家庭について深く語る。クライアントの家族理解が詳細に示される。1月下旬になり、状況はよくない。しかし、何とか乗り越えられる感じがすると言う。ローランサンの窓際の女の絵を見ながら、自分と重ね合わせて詳しく心情を語る。二者間での共通理解を深くする。状態がよくないのでかかり付けの医師に相談するために実家に帰る。主治医は、「これなら大丈夫」とサポートする。その後は安定に向い、元気を取り戻す。コラージュを作って持参する。コラージュを媒介にして語り合う。安定する。来談回数も月に1回程度になる。卒業研究の話をする。バウムとコラージュと描画を持参して話し合う。媒介物を間に置いて話し合うことで、クライアントは安心を獲得する術を身に付けている感がする。竹久夢二の絵に惹かれるとのこと。うなずく。夢二の絵について深く語り合う。7月、2枚の描画を持参する。持参した絵についてイメージを交えた話をする。

交流が深くなる。絵を描いて持参して、話し合うことで、気持ちが落ち着くとのこと。＜そうで

すね、絵を語り合うことで2人の関係の中で貴方の心に安心の萌芽があると言うことは嬉しいですよ」と返す。「絵を描いている時、以前は絵を描くことで自分がどうにかなるのではないかと、もうここから抜け出せないのではないかと感じていたが、最近は何か違うものが出てくるのではないかと、それが絵の中に象徴され、それを発見する楽しみを感じるのです」と言う。「今回も大きな波が来そうだったが、何とか乗り切れそうです」と言う。「波は自分のものだから、それを抑えるのではなく、うまく波乗りができるようになれるし、なることが大切なことですね」と言う。友人が箱庭を作りたいと希望するので、箱庭を作ってもらったとのこと。「自分と比べて、自分は彼女以上に自由に、上手に生きているのだと言うことを発見した」と言う。＜これは面白いことですね。＞と伝える。8月、箱庭を作ること、話すこと、眺めて感じるイメージを語ることで、安定を獲得している感じがする。月半ばで、クライアントは実家に帰る。

後期が始まって、実家から帰ってくる。また波を感じると言う、しかし以前の波とは違った感覚だと言う。＜何とかかなりますか、無理なら、また一緒に乗り切りたいですね＞と返す。絵を描いて持参する。絵を媒介とした話し合いをする。クライアントの感じることを、思うことを中心に深く、ゆったりとした話し合いが続く。「あ！落ち着きます。気持ちがスーとします」とのこと。

11月、「主治医との関係に変化を感じる」とのこと、「この辺で、完全に脱却できたような感覚がする」とのこと。「絵を描いて、ここで語り合ったこと、箱庭を作って、イメージを語らいあったことが、よかったのかなと感じます」と言う。

「私は、色々と歩き回って(寄り道をして)ふわふわしていると言えるかも知れません。でも、もしかしたらこれが私なのかもしれない。他の人もこんななのかもしれない。自分ひとりではなく、皆さんもそうなのかもしれない、多くの方の箱庭をみたり、協力してくれた方と話し合ってみて、そんな感じがする」と言う。

自我と社会性について語る。授業で話があったとのこと。自我は幼少時より芽生え、自己主張が社会性形成の引き金となるとのこと。対人交流の豊かさは自我の柔軟性を強化し、交流の少ないことは自我の柔軟性にかけることになるのではないかと言う。＜好いこと学んだのですね。理論的ですね。概念としてはよくわかりますね。貴方に実行できそうですかね＞「そうですね。ちょっとはできるかもしれないけど、私には波があるから、すぐに頓挫するかも知れませんね。私は繰り返し、繰り返し波が来ますから」＜そうですね。貴方は時折、波がきますね、でもこれまで何度もそれをうまく乗り越えてきていますね。すばらしいことだと思いますが＞「そうですね、激動もあったけどだんだんと落ち着いていますからね」と言う。「何度か乗り越えた。自分のペースで、自分の背丈で、生きようと思っていたが、これもやはり知識のレベルで、現実にはそうはならなかった。しかし学内を歩いていて、はっとして、分かった感じがして、乗り越えられたと実感した。こんなこともあるのですね」。「描いてきた絵に割れ目が描いてあるが、ここから何かが湧出する感じ、期待したい」とのこと。落ち着いたので、クリスマスコンサートに行った。何か別世界にいるような感覚だった。

第十四期の面接理解

何か大きな変革がある感じがする。描画やコラージュ、箱庭などを媒介にして、クライアントは自分を解放し、再統合する。箱庭は自分の研究テーマにしているので、多くの協力者の箱庭を見ることができるし、多くの箱庭制作の過程から伝わってくる何ものかがある感じである。自分の箱庭と協力者の箱庭制作に立ち会って比較することで、深い自己分析ができる感じがする。そこで感じたことを、カウンセラーとの関係で再度検討する。今日のこの動物は、協力者にとってはこのようなシンボルとなっているが、自分の場合は違ってくることの実体験から、シンボルの持つ意味を理解する。シンボルの意味を確認するためにカウンセラーに発言を求めて、その内容から、自己のシンボルの意味を再定義する。クライアントに取っては、シンボルは行動予測であり、行動可能性である。箱庭にもコラージュにもこれが正解という基準が定かでないこともあり、クライアントにとっては、自己のシンボリックな意味に共感し、確認作業を行っている感じである。描画、箱庭、コラージュ、バウムなど色んな作品を媒介として、クライアントとカウンセラーは語り合い、認知的・情動的共感を共有し、分かち合い、交流を深め合うことができた。結果、長い間支援を受けてきた投棄からも開放されるようになった。

第十五期；X+7年1月 -12月～クライアントにとっての意味ある行為、献血

新年を記念して献血に参加した。度々、献血に行くことにしていると言う。クライアントが献血に度々行くのは特別の意味があるとのこと。＜うなずく＞。持参した絵が大きく変化する。＜何かあったら連絡してください＞と心配しての布石のためのかわりであったが、「大丈夫です。ここがあるので、大丈夫です」と言う。「ここは私の心の居場所ですから」と言う。絵を描くことで、それを話題にすることでクライアントとの心に多くの糧を送ることになるらしい。絵を描くことで、クライアントの心を語り、絵で心を表現し、語っている。2月半ば、「大波が来る。毎日が綱渡り状態です」と。描画の色彩が大きく変化する。見事なまでの変容である。＜すごい色合いに変化ですね＞。「そうです。これが今の私です」と言う。2月後半に入ってバランスを取り戻す。＜何とか乗り越えましたね＞「そうです、今回も何とかかなりました」とのこと。

描画を持参する。以前と同じ傾向の絵となる。クライアントにとってはこの絵が普通なのだ。体験者と観察者では、共通体験は不能だとのこと。擬似体験でしか体験できないのだと言う。描画もクライアントの中での通常になる。安定する。

絵を描いて、来談する。クライアントにとっての普通である。落ち着いている。友人の結婚式に参加したとのこと。＜どんな感じで、参加しましたか＞と聞くに、「そうですね。何か別世界のイベントですね」5月後半、急に絵の傾向が変わる。すごい絵に変わる。＜何かを訴えているのですね＞と言うと、「そうですかね」と返す。訴えたいことについて詳細に語る。授業をしながら、並行的に心理面接を継続することについて語る。＜関係のあり方について＞語る。何度がテーマになったことがある。

X+7年6月；認定心理士の資格を申請し、受理されたとのこと。ロ・テストが授業で話題になっ

たのか、強い関心を示す。ロ・テストについて語り合う。投影の心理学的意味について語り合う。関心の深さを示す。＜興味があるのですね＞と言うと「そうです。ロ・テストと関心のある箱庭やコラージュとの共通点や類似点を理解したいです」と言う。箱庭を見てほしいと言う希望で、箱庭を見る。箱庭のイメージを深く語り合う。

7月、来談回数が極端に少ない。不思議な感じがする。こんなに来談回数が激減することもあるのだと感じる。いよいよ心理面接関係からクライアントは卒業するかなと感じる。8月、実家に帰り、主治医を尋ねる。アルバイトなどしていると告げると医師も驚いたとのこと。最近はやが来たり引いたりする感じがするが、何か仕事があると、それに依拠することで波が小さくなる感じとのこと。昨日は友人とともに町にでた。

一日中、町を歩いたり、ショッピングしたり、商品選びをしたりして、疲れたとのこと。＜珍しい行動ですね＞と返すとニコリする。

絵を持参する。これまでと全く違った絵になっている。用紙の中央にはっきりとした絵姿がある。長い間、書き続けられた絵姿が完全に変化した。これは一大事である。クライアントは平常であり、平常心を示している。元気である。

9月、2枚の絵を描いてくる。一枚は常識的であり、他の一枚は抽象的である。コントラストの激しい絵である。しかも9月の面接はこの一回だけであった。

10月は面談回数が増加する。7回の面接になる。身体的変調がある。自分では要因が分かっているのだが、といいながら、打ち明けない。今は自分のことで精一杯ですと苦笑する。ここしばらくは調子が優れないが、何時ものことで、多分大丈夫だと思うとのこと。

絵を見てほしいと言って来談する。A3の用紙に不思議な感じの絵を描いている。

絵について深い話し合いが続く。両者で納得する。安心ですと言って分かれる。

11月、公開講座の講師の話に感動した。めったにこのようなことはないのと感じるとのこと。講師の話について精緻に話し合い、共通理解を深めることができた。昨夜はしんどかった。でも、ここがどん底の感じがする。これからは上向いてくると感じるとのこと。学内でのアルバイトにつくことになる。これについて相談があったので、やってみてはと支えていたら、うまく採用になり長期のアルバイトができるようになった。

アルバイトをしながらの授業・研究ということになり、大丈夫かなと思ったが、軌道にのった様子で、アルバイトと授業と研究と言う生活になり、来談回数が激減する。

第十五期の面接理解

クライアントと数年間の面接を継続する内には、何が起こるかわからない。この期の主要テーマは描画(作品)を媒介としての面接を工夫し、創生することにあった。

クライアントが心理臨床分野に関心があり、多くの投映法を自分から実施して、その解釈や意味内容を求めたり、自分の描いた自由画の心理的内容について見解を求めたりした。この状況に対して、カウンセラーは、「クライアントの作成動機、持参動機、描画動機、自身の作成過程に感じる

内的過程、自己の解釈など」について丁寧に傾聴し、クライアントの内的過程の共通理解に努力した。具体的には、クライアントが自由に描画を描いて来談し、描画を見てほしいと希望した時には、＜この絵をどんな気持ちで描きたくなったのか＞とか＜描く過程で、クライアント自身が感じたこと、イメージ化したことを聴きたい＞＜語り合って、今どんな感じがしますか＞などを面接で取り上げた。

このような導入面接を契機にしてクライアントは自己イメージの世界にカウンセラーを導入した。カウンセラーはクライアントのイメージに接近し、そこに漂う何物かを共感し、理解し合う面接を構成した。

「今日は絵を描いてみました」＜そう、見せてくれますか？＞袋の中から大きな紙に描いた絵を二人の間に置く。＜ふーん、黒が基調ですね、色合いの差で絵姿を描きだしているのですね＞「そうですね、黒は私の基本です。基本にアクセントを付けて自己表現をしているのですかね」＜なるほど、そうですね、そう言う意味では、貴方が滲んでいますね、そう言う意味で、この絵は貴方自身ですかね＞「そうですね、自分ではそうだとは言いませんけどね」＜そうですね、ここまでは客体化は無理ですね、そういわれればと言うところでしょうかね＞「そうですね、半々と言う感じがですね」＜はい、半々と言うのはうれしいですね、半々のところで色々話し合っていると、これまで意識に上らなかったことがでてくる感じがしますが…＞「そうですね、気づいていない世界を発掘できるのですかね」＜と考えるのですけど、どうでしょう？＞「なるほど、そうですね」以下略。

このような接近法を導入すると、クライアントは直接的な自己開示に取り組まなくても間接的、象徴的に自己開示を行なうことが可能となる。結果として、自己理解も間接的過程を経てより深くなる。ロ・テストを実施された場合も、クライアントの持参したプロトコールを丁寧に検討すると、認知の特徴、思考過程の特質、情動の放出過程の有様が手に取るように、理解できる。しかもクライアントとカウンセラーの共通理解の元にクライアントの特徴理解を深めることができる。例えば、クライアントがあるロ・テストで、微笑部分を捉えて反応した時には、微笑部分に注目したクライアントの注視過程、反応形成過程を詳細に渡って話し合う時に、クライアントの微細部分への反応過程とネーミング過程が両者の共通理解の元で分かり合えるようになる。バウムテストの場合、クライアントの幹の書き方、根っこのかき方、枝、果実のつけ方などを、丁寧に傾聴すると、クライアントの指示に対する反応過程の詳細、結果を導くための過程、結果の意味合いの特徴を理解することが可能となり、この作業を通して、クライアントの自己理解、自己分析がより深くなる。

第十六期 一面接回数が減少する一

X+8年4月；約5か月の間、クライアントからの面接申し込みはない。学内でであっても「元気にやっています」と言う。授業、研究での交流は続いたが、私的な話は語られなくなった。4月になって久しぶりに面接の申し込みがあり、面接する。昨年11月以来、アルバイトをしながら生活をしている。アルバイト先のスタッフの信頼が厚く、適応がうまくいっているとのこと。アルバイトをすることは、心理面接に勝るものがあり、アルバイトがクライアントの生活に生きがいを見つけ

だす結果となった。

X+8年5月；元気とのこと、絵を持参する。水道から勢いよく水が出ている絵、珍しい絵で、噴出する水について、そのシンボリックな意味について語り合う。次の絵は少女の絵姿が描かれている。輪郭もはっきりする。少女について語り合う。自己像との間で統合化が生まれる。

X+8年6月；一回だけの面接、修士研究の要綱を持参する。

X+8年7月；来談がない

X+8年8月；来談がない

X+8年9月；一回だけ面接；元気で生活しているとのこと

X+8年10月；絵を持って来談する。アルバイト先のスタッフとともに旅行に行ったとのこと。

X+8年11月；箱庭を作ることで自分が引き込まれることを体験したとのこと。

X+8年11月；ブロックの心理学会で研究成果を発表する。

おわりに

交流関係を形成し維持すること；クライアントとの数年に渡る長い旅を自然な形で終焉を迎えた感じがする。本事例の場合、クライアントが一人で生活するという事情もあり、面接を継続しながら必要に応じて環境的な支援も実施した。具体的には混乱が起きた時には、保護者に連絡したり、医療機関に導入したりした。緊急事態の折に病院に緊急入院した時には、担当医から、電話でどのように対応したらよろしいかというような言葉もあり、返事に躊躇したこともあった。しかし、緊急な場合に、保護者への連絡の前に、カウンセラーに連絡があったことはクライアントが混乱状況の中でカウンセラーの名前と電話を担当医に知らせたのだと思うと、関係の大切さを実感させた。7年間経過後にクライアントは無事、卒業し、就職した。長期間に渡る心理臨床的面接を継続しながらの授業、研究指導と言う3機能を実行したことになる。ここでのカウンセラーはクライアントとの間にしっかりした交流関係(カウンセリング関係、治療関係)を形成し、この交流関係をクライアントの日常生活(心的機能)の拠り所とし、安心と癒しの場を確保しながら、同時にクライアントの日常生活の具体策を支援すると言う2機能を同時並行的に担うことになる。ここでの「生き方の支援」とは、クライアントの生き方をリードするのではなく後押しすることである。ここで言う後押しは遮二無二にうしろを押すのではなく、クライアントの特性・興味・関心に応じた支援方略を相談づくで、創生することである。

クライアントが入学当初の医師紹介状からは、生活指導・カイダンス程度の支援で、対応できるのではないかと推察したが、時間経過と共に、継続した治療面接対応の必要なことがわかり、面接契約を結ぶように努力したが、クライアントが契約面接に拒否的なので、希望を入れて、クライアントが来談を希望する時、カウンセラーに時間がある限り面接を受け入れ、継続することにした。結果的にカウンセラー自身が、枠を自覚した面接過程を続けることを第一とした。具体的には、クライアントの面接希望に可能な限り対応し、時間の許す範囲内で面接に応じるようにした。面接場所は研究室を利用し、授業の後などでクライアントから面接要請があった場合には、研究室に来て

もらって、時間を決めて面接するように計画し、その計画に両者が沿うように心がけた。結果、状態の悪いときには一日に2～3度も面接することがあった。不定期、随意、長・短織り交ぜた面接となった。

補助手段としての心理検査・描画・箱庭の導入；クライアントが心理学に関心の深い学生だったこともあって、心理検査や描画、箱庭に興味を持って、自発的に作品を持参することが多かったのだ。これらの検査や描画、箱庭などを媒介として、夢豊かな面接を構成した。このような面接はクライアントも話題が豊かであり、多様なイメージが湧出し、豊かな面接過程が創生され、クライアントの心性について詳しく語り合うことが可能となった。クライアントにとって、自分自身を開示するのではなく媒介物を導入した面接過程となるので、語り易くなると同時に豊かなイメージを作り出すことができることになり、多彩な面接過程を創生することができた。中でも、クライアントは箱庭と描画への関心が高く、箱庭・描画から想起されるイメージを語り合うことが有効であった。イメージを語り合い、共感し合うことになる。ある種のイメージ面接と言える。クライアントは自己理解の補助として心理検査の結果に興味を示したり、描画・箱庭にもその解釈や説明を求めて来たり、クライアント自身が納得したり、不承知であったりしたが、ここでの自己理解や不承知は面接を構成するための有力な武器となった。心理検査の結果や描画などの作成(表現)過程を語り合うことがクライアントとカウンセラーにとって大切な情報となったし、判断材料となった。

結果として、見立てと面接方略は、常に変更し適切な方略を工夫し、再検討した。その結果、象徴的表現を借りれば「幻想(イメージ)と現実の狭間での面接過程」であった。具体的にはクライアントはより幻想を語り、カウンセラーはより現実を語り、両者の語りを噛み合わせ、折り合いをつける過程であった。互いの物語が噛み合ったり、離れたたり、融合したり、確執を起こしたりと、その面接過程は多彩であった。この関係をクライアントは「自分の心の居場所」にし、「安らぎと癒しの関係」とした。クライアントはこの関係の中で再適応のための力を養い、試行し、訓練してきたものと推察される。面接開始から6年過ぎから、アルバイトができるようになった。しかもアルバイト先のスタッフとの関係がクライアントにも引き受けられ、有意義なアルバイトとなった。アルバイトでの時間的制約もあったか、面接回数が少なくなった。キャンパスで偶然に会うことがあると、挨拶し、元気ですと言葉を返していた。研究成果についても発表した。卒業後は、アルバイト先で、正規スタッフとして採用され、無事就職もできた。現在は別の職場で働いている。

長期間の継続的面接過程を経験した。全過程を通して担当者として常に留意したことについて列挙しよう。

- (1) クライアントの症状は何を訴えているのだろうか、何か言いたいのだろうかを探索し続けてきた。結果として、理解できた(見立てと面接方略)ことは、「人は変わらないもの、変えることは出来ないもの」と言う確認であった。
- (2) それではこの面接過程は何だったのか、それは「変わらぬものを上手に使って、生きる術を身に付けること」である。
- (3) この面接過程はクライアントが自分らしい生き方を発見する過程を支援することになる。

- (4) クライアントがクライアントらしく生きて行くために、より深く、幅広いクライアント理解を面接関係の中で、相談づくで、具現化し、その理解の上に立って、クライアントの生き方を創生することになる。
- (5) 本事例の場合、定期的面接契約が出来なかったので、カウンセラーとして、面接心得を決めて、堅持し続けた。それは「これは心理面接であり、普通の面接ではない」ことを意識し続けることだった。具体的には「クライアントのカウンセラーの間の心理的関係距離に注目し、接近関係」を堅持することである。
- (6) 何度かのアクティング・アウト(危機状況)では、直接的対応で乗り越えた。具体的には医療機関に案内したり、保護者に連絡して、緊急対応を行った。
- (7) クライアントの学年進行に連れて、心理学的知見が導入され、心理検査・描画・投映法が話題になり、クライアント自身が実施して来談するようになったので、それを積極的に導入し、面接関係の中での介在として活用した。その結果、直接的自己開示とは違ったイメージ世界と現実世界の間隔的な面接が構成され、面接過程に夢や希望が導入され、夢豊かな面接過程が構成された。
- (8) 短期留学を支援すべきかについて、心配したが、結果的には新しい見聞や経験を積むことになり、多くの適応的体験を積むことができた。
- (9) アルバイトに恵まれて、これが契機となって、心理面接関係から脱却できた。アルバイト先のスタッフの協力もあり、クライアントの人間関係にかかわる適応力は豊かになった。

付 記

本論文を執筆しながら、執者のこのような心理面接はどのような考えがあるのだろうかと考えながら執筆していた。丁度その時に読んだ「ナラティブ関係」の論文に親和性を感じた。執者の考え方には「ナラティブの考え方」があるのかなと思って文献としてナラティブ関係の論文を選んだ。

文 献

- 河合 隼雄 2005 ナラティブと心理療法 臨床心理学, 5, 547-552.
- 岸本 寛史 2004 緩和のこころ ―癌患者への心理的援助のために― 誠信書房
- 森岡 正芳 2005 ナラティブと心理療法 臨床心理学, 5, 267-272.
- 諸富 祥彦 2005 ナラティブと心理療法 臨床心理学, 5, 705-710.
- 村瀬嘉代子 2004 統合的心理療法の考え方 ―心理療法の基礎となるもの― 金剛出版
- 高橋 規子 2005 ナラティブと心理療法 臨床心理学, 5, 401-406.
- 高橋規子他 2001 ナラティブ・セラピー入門 金剛出版
- 吉川 悟 2003 ブリーフセラピー入門 臨床心理学, 3, 866-873.